

第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号17 立命館慶祥高等学校（石狩支部）

「たりないわたしたち」 作：立命館慶祥高校演劇部

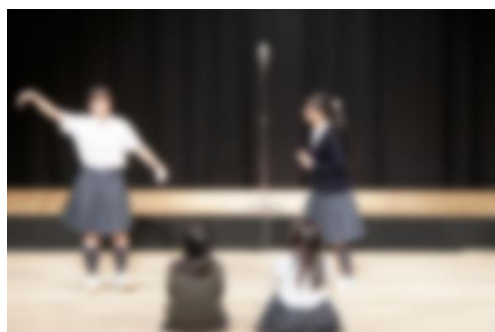
彼女たちの一風変わった青春を共に駆け抜けた。そんなすっきりとした後味が心地よかった。

文化祭の準備に奔走する教室。そこには四人の生徒がいた。クラスメイトたちの輪に入れず、ただ息を潜める様に過ごす「三山」。クラスの中で異質な存在感を放つ「岡田」。二人は一枚のスクール漫才大会のポスターをきっかけにコンビ「三山岡田」を組むこととなる。一方で、クラスの中



でも中心的人物である「遥香」と「来実」も「三山岡田」に続いて幼馴染コンビ「流星アプリコット」を結成し、大会へと挑む。高みを目指し、切磋琢磨し合う二組の関係には多くの魅力があり、観客の心を強く惹きつけた。また、劇中で繰り広げられる漫才の本格的な出来映えは本作の特徴の一つだ。どのネタも個性豊かで完成度が高く、場内での笑いが絶えなかった。

対照的な二組のコンビが中心に話は展開するが、それぞれの関係や性格が表れるドラマがあり、どちらにも好感が持てた。一見正反対な「三山岡田」は共に自分の行動が笑われることに「笑われたくない」という葛藤がある。そこを逆手に取ることで二人は人々を「笑わせられる」ように決意する。「笑われてるんじゃない、笑わせるんだ」と言い放つ岡田は、今まで自分と周囲のズレを埋めようとひたすらに努力し続けた彼女だからこそ、私たちの胸に強く響いた。また、長い付き合いである「流星アプリコット」は成長することで変化していく環境や、普段表には出せない悩みから結成されたコンビに思え



た。特に人間関係の中で自分を押し殺し自己嫌悪する来実の悩みには多くの共感が集まった。そんな来実との青春を求めた遥香は予選敗退を機に価値観の違いから口論に発展してしまう。しかし、二人は準決勝へと進む「三山岡田」への悔しさ、妬ましさといった率直な思いを口にすることで改めて互いを見つめ直し、絆を取り戻していく。様々な点で対照的な「三山岡田」と「流星アプリコット」だが、彼女たちには大きな共通点があった。それは漫才への情熱だ。青春をかけ、共に悩み、涙を流し、そして笑う。本気で漫才と向き合ったからこそその熱量は、私たちの心に熱く伝わってきた。

相方と補い合いながら前に進む彼女たちの姿は、足りない部分を抱えながら生きる私たちと重なって見える。だからこの物語は、私たちを揺り動かし、心に深く刻まれるのである。